

書く力を養う英語科の教材および学習指導開発（2）

松尾 砂織 村上 直子 檜葉みつ子 柳瀬 陽介

1. はじめに

昨年度は、書くことの言語活動を通して創造的思考力を育成するための学習指導開発を行った。英語科で定義した創造的思考力とは、①創意工夫して何とか自分でやろうとする力、②自分の考えや気持ちを、初歩的な英語を用いながら他者に伝えようとする力、③他者とのコミュニケーションを通じて自分の表現方法を磨こうとする力であり、そのような力の育成に適した学習課題として、書くことの言語活動を取り入れたものである。

だれに向けて、何のために、何を書くのかという具体的な課題設定をすることに留意して、中学校2年生を対象に、文通による交流を行っているアメリカの中学生に向けて「校内の好きな場所を紹介する」という単元を開発した。また、中学校3年生を対象に、書いて準備をして、show and tell（話すことの活動活動）につなげる「何かを紹介する」という単元を開発した。

これらの実践の成果は、書くことの言語活動に対する生徒の意欲の向上である。読み返しや書き直しを経て、作品の完成度を高めることによって、よりよい表現を考えて書こうとする意欲が増すことが、生徒の評価カードの記述からわかった。しかし、知識の習得が十分でないために、表現したいことを伝えきれないことがあり、特に、正しい語順や語法を用いて文を書くことには、課題が残った。

書くことの言語活動は、考えや気持ちなどを表現する目的のために、習得した語や文法などの知識を活用させる機会となる。だが、読み返しや書き直しが可能であるというメディアの特徴を利用して、書くことの活動を行わせながら語や文法などの知識の習得を促すこともできる。中学校学習指導要領解説外国語編にも、「文法については、コミュニケーションを支えるもの」ととらえ、コミュニケーションを実際に行う言語活動と効果的に関連付けて指導することが重要である」とあり、活用を通じて習得を促進することが示唆されている。

本研究の目的は、昨年度の成果と課題を踏まえて、文法指導と書くことの言語活動とをさらに関連付けて書く能力を育成するための学習指導開発を行い、その成果と課題を明らかにすることである。

2. 研究の構想

(1) 研究の目的

本研究は、先に述べたように4技能の能力の中でも、特に書くことに着目し、書く力を養う英語科の教材と学習指導法を開発することをめざした2年次の取り組みである。1年次の課題を踏まえて、生徒の発達段階に応じながら、既習事項を用いた書く活動を繰り返し学習することにより、学習指導要領にある「身近な場面における出来事や体験したことなどについて、自分の考えや気持ちなどを書くこと」といった言語活動の充実および定着を図ることをめざしている。

(2) 研究の方法

本研究では、中学校1, 2年生の学習者を取り上げて考察する。自分の生活や習慣をテーマにした英文を書いてまとめ、クラスの仲間たちと交流し合うという実践と、物語の要約文を書いて班で校正し、クラス内で交流しあう実践2つの実践を通して、書くことの言語活動を通じた創造的思考力を育成するための学習指導を取り上げることにする。

(3) 検証の方法

検証の材料として、生徒の授業評価カード、ワークシート、書いた作品、ペアや班活動の様子、授業観察の様子などをもとにして考察を行う。

(4) 「書くこと」における具体的な指導方法

既習の学習内容をペア活動でくり返し行い、基本表現の定着を図らせたり、学習者が自分の考えや理由を付け加えて書くことができるように、接続詞を使用させたりした。

3. 実践事例 1

(1) 授業の構想について

①教材について

- 単元名 Multi Plus わたし的一天
- 指導者 村上直子
- 学年 中学校1年41名(男子19名 女子22名)
- 実施時期 平成23年11月

本単元では、習慣を表す現在形の練習として、起床から就寝までの基本的な生活パターンの行動に必要な語句が出てくる。そして、それらをいつ行うか、という時刻を表す言い方も学習できる。Step1では、基本的表現を学習したあとに、Step2で自分の一日の生活パターンについて書くことで定着をはかる。そしてStep3で友だちにたずねるというSpeaking活動を取り入れることによって疑問文や応答文を学習する。さらにはその結果をもとに、友だち(第三者)について書いてまとめることにより、既習である三人称単数現在形の復習へもつなげることができる。書く活動から話す活動へ、そしてまた既習事項を付け足しながら書く活動によってまとめるなど、活動をつなぐことができる題材である。

指導においては、既習事項や新出語句などを使いながら、自分の生活や習慣をテーマにした英文を中心に、クラスの仲間たちと交流し合うという活動を目的として、本単元を指導した。「書くこと」を中心とした活動をめざしたが、そのためには英文や表現の意味を理解できるように「聞く、話す」などの活動も取り入れ、読んで理解できるようになるまで口頭練習や繰り返し練習を取り入れた。また、交流の際には自分で言いたい語句や知りたいものについては、辞書を活用させるなどして、表現の幅を広げた。クラスの仲間と書くことによって交流するという一方で、話すことよりも熟考できることの面白さや、面と向かって伝えることに比べて間接的なコミュニケーションになることから、相手に配慮した書き方についても考えさせた。

②教材の目標

- 間違いを恐れず意欲的にコミュニケーションをさせる。
- 一日のパターンについて、友だちにたずねたりさせる。
- たずねられたことに返答させる。
- 辞書などを使い自分の言いたいことを的確に表現させる。

③学習計画(全4時間)

第1次 一日の生活パターンについて内容理解する

(1時間)

第2次 相手の生活についてたずねたり、自分の生活を返答したりする。(1時間)

第3次 日常生活について書くことによって友だちとたずねたり答えたりする(2時間)

④授業の視点

一日の生活について表現する英文やフレーズを定着させた後、相手に生活やあるテーマ(クラブ活動や週末の行動など)について尋ねる。小集団で質問用紙を回し、辞書や仲間の表現を参考にしながら自分の回答を書く場面を設定した。

(2) 授業の実際

学習計画の第3次2時間目に実施した学習課程を次の表1に示す。

表1 学習課程

学習事項	指導過程と留意点や評価・学習活動
1. 学習課題への接近	①あいさつや口頭練習を行い、英語学習への雰囲気作りをする。 ・ペアで単元に出てくるフレーズを日本語で読み、英語で答えるという1分間のペア活動を行う。
2. 学習課題の設定	②本時の学習課題を設定し、学習への見通しを持たせる。 ・クラスの仲間と、日常生活についてたずねあうという目標を提示する。
3. 学習課題の追及(個人で)	③生活の基本パターンに必要な動詞や語句を導入し、口頭練習をする。 ・プロジェクターで生活パターンの表現を提示し、発音練習をする。 ④疑問文を提示し、口頭練習した後、ペアで相互にたずねさせる。 ・What time do you...? や What do you do...? など時刻や行動をたずねたり、How...?で手段をたずねたりする英文を提示し、口頭練習させたあと、指名して自分の答えを言わせる。 ・ペアでたずねあい自分の回答を言えるようにする。
(班で)	⑤ワークシートを配り、生活パターンの中で聞きたいことを書かせ、回収する。そのあと、ワークシートをランダムに配布し、そこに書いている質問に対して返答をさせる。 ・自分のことも英文で書き、相手にたずねるように指示する。 ・文と文のつながりを意識させ、まとまりのある文章を作らせる。 ・相手が分かりやすい表現になるように工夫する点を提示する。 ⑥自分の手元にあるシートを、班で回しながら、自分たちの回答をつけたしていく活動を繰り返す。 ・仲間の表現を参考にし、良い表現は取り入れる。 ・辞書の活用を促し、自分自身の表現したいものが書けるように促す。 (留)時間設定をし、よい表現、参考になる表現は取り上げてさせる。
4. 本時のまとめ	⑦本時の学習目標に対する自分の考えを書かせる。(評)他者の表現を取り入れたり参考にしたりして、前回よりも多く書いているか。
5. 次時への発展	⑧ 次時の学習へ見通しを持たせる。

(3) 実践結果と課題

本単元に必要な表現は、授業の前半にペア活動を取り入れて定着させた。そしてプロジェクターに教科書の英文などを映しだし、口頭で読めるようにさせたり、疑問文に対する答えを数名に当てて言わせたりするなど繰り返しの指導を行った。基本表現の定着のあと、それを自分の表現にするために、ペア活動やインタビュー活動も取り入れた。それらにより、決まった表現や定型文に対してはかなり定着してきた。そこで「twitter」と称して、一つの質問に対して複数からの書き込みによる回答を得る、というような活動を取り入れてみた。すると、まとまった文章を書くことにはかなり差があった。どう答えたらよいかわからないものもあった。しかし、生徒が書いた日記、文章などに対して指導者がエラーの指摘や添削をして返却しても、なかなか文の質が高まったり広がらなかつたりすることが多い。今回、生徒たちの文章に広がり生まれたのは、他者の作品を見せたときであった。指導者が良いと思ったものをいくつか提示して、どこがよいのかを考えさせ、「ここはもっとこうするとよい」などアドバイスを、など行ったあとに書いた作品は、質、量ともによいものが増えていったように思う。そして、自分の質問に対して答えてくれた英文を見てどう思ったのか、その感想を紹介したことも効果的であった。生徒が「書きたい」と思うような動機付けをいかにさせるかの仕掛け作りで、生徒の意欲が英文内容の質の高まりにつながると実感した。この単元の最後に生徒が書いた感想は以下のものであった。

- ・質問にちゃんと答えてくれたし、その質問からまた質問をしてくれたりしてうれしかったです。けど、時間が短すぎるのももう少し長くしてほしいです。
- ・みんなそれぞれ違った解答で面白かったです。パソコン、ピアノ、水泳、そろばんといった習い事や、みんな同じではなかったということがわかりました。
- ・人によって様々な違いが見られた。しっかり4文で書けたし、同じことをする人もいたのでびっくりした。またやりたいです。
- ・今日は、誰に回ったかわからなかったけど、人それぞれに前よりたくさんの文を書いてくれたので、うれしかった！！もっと知りたいと思う。他の人のQ（質問）をA（答える）する時には、たくさん文が書けるようになった。

生徒が自分で伸びていると実感するためには、活動を単発で終わらせずに、繰り返しもしくは、定期的

同じ活動に取り組ませることも効果的だと改めて実感した。繰り返し行う際に、実際の生徒たちの感想やよりよい作品を見せると、そこから気づいたり学んだりすることは大きい。「たくさん書いてくれたことはうれしかった」とあれば、自分ももっとたくさん書こうという意欲を引き立てるし、よい英文だと紹介すれば、見たものはこういう表現を使えばよいのか、とまねようとするし、紹介された生徒はもっといいものを書こうとする相乗効果も生まれた。

課題としては、例えば次のように書いた生徒がいる。

What do you do on Saturdays? I do my homework and I use a computer. What time do you go to bath? I go to bath at nine thirty.

目標は、「What time~? やWhat do you do~?を用いて質問を考えよう。4文以上で書いてみよう。」と提示した。指導者はもっと生徒たちに、一貫したテーマや、ストーリー性のあるもので文を展開していくなどの、つながりのある英文を書かせるための視点を持たせることが必要である。

さらに、インプットさせる語彙や表現を概念として整理させることができれば、既習事項の使用頻度ももっと増えていくし、反意語や同意語など同時に関連づけて教えていけば、生徒たちの表現に広がりをもたらすことができる。



図1 ペアによるインプット活動

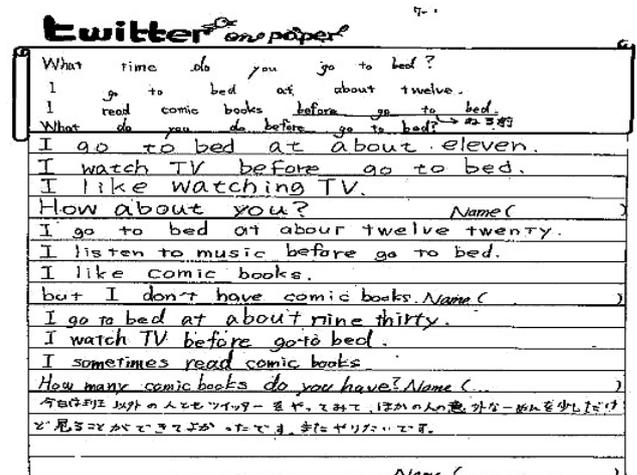


図2 生徒作品より

4. 実践事例2

(1) 授業の構想について

①題材について

- 単元名 Unit6 The Story of Silent Night
- 指導者 松尾砂織
- 学年 中学校2年41名(男子20名 女子21名)
- 実施時期 平成23年11月～12月

本単元は、クリスマスイブにジュディがおばあさんからクリスマスプレゼントとして1冊の本をもらい、その本について絵美と話すといった場面設定になっており、その本の中には「きよしこの夜」が誕生した物語が扱われている。この誕生秘話は、物語の構成と展開が分かりやすいだけでなく、「きよしこの夜」を扱った内容のため、生徒は親しみをもって読むことができる。そこで、物語を読んで、その内容を正しく読み取る段階での「読むこと」の指導だけにとどめず、さらに読んで分った事実を簡潔にまとめるといった「書くこと」の(イ)「語と語のつながりなどに注意して正しく文を書くこと。」と、(オ)「自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと。」に関する指導を行い、読んだことをもとに、その内容を簡潔に書いてまとめることに焦点をあてた指導を行うことができる内容であると考えられる。

指導においては、書く活動時に新出事項を活用できるように、チャンクカードを用いてペアで繰り返し読みあう活動を取り入れた。そして、口頭で繰り返し発音するだけでなく、つづりや語順を正しく覚えるような声かけを行った。読んだことをもとに、内容を簡潔にまとめて書く指導では、キーワード(1818・before Christmas・organ・Franz・Joseph・church・Silent Night・poem・guitar・music・nice and simple)を提示することによって、大切な個所を意識させるだけでなく、それらを用いて書くように指導した。また、書く際には辞書を活用したり、書いたものをグループで読みあったりする場を設定し、他者と要約文の書き方や表現方法を交流することができるようにした。

②教材の目標

- 辞書を活用するなどして、積極的に書こうとする態度を育てる。
- There is(are)の文構造を理解できるようにする。
- 動名詞の意味や用法を理解できるようにする。
- キーワードを用いて、内容的にまとまりのある文を書くことができるようにする。

③学習計画(全7時間)

- 第1次 There is(are)の文構造を理解する。(2時間)
- 第2次 物語を読み、あらすじや心情などを読み取る。(2時間)
- 第3次 物語を読み、本文に対する感想を述べ合う。(1時間)
- 第4次 キーワードを用いて、内容的にまとまりのある文を書く。(2時間) ※本時1/2

④授業の視点

物語のあらすじを相手に分りやすく伝えるため、キーワードや接続詞を用いて要約文を個人で書いてから、書いたものを小グループで読みあうなど、要約文の書き方や表現方法を吟味する場面を設定する。

(2) 授業の実際

学習計画の第4次1時間目に実施した学習課程を次の表1に示す。

表1 学習課程

学習事項	指導過程と留意点や評価・学習活動
1. 学習課題への接近	①英語のあいさつやペアによる口頭練習を行い、英語学習への雰囲気づくりをする。 ・1分間計測し、一方に英語を読ませ、もう一方に日本語で答えさせる。役割を交替させる。 ・トピックを与え、1分間ペアで話をさせる。 ・話したことをもとに、2分間でトピックに関する内容や感想を個人で書いてまとめる。
2. 学習課題の設定	②学習課題を設定し本時の学習へ見通しを持たせる。 ・書くときには、辞書を活用するように伝える。
3. 学習課題の追及(個人で)	③前時の学習事項を復習させる。 (留) プロジェクターでピクチャーカードを提示し、話の流れを確認してから、班で音読練習をさせる。 ④物語の中からキーワードを探させ、それらを用いて要約文を書かせる。 ・個人でキーワードを考え、全体の前で発表させる。 ・意見としてでなかったものは教師が提示し、それらを用いてわかった事実を順番に書かせる。 ・まとまりのある文を書くために接続詞を使わせる。 (留) キーワードは(1818・before Christmas・organ・Franz・Joseph・church・Silent Night・poem・guitar・nice and simple)とする。接続詞は(and・or・but・so・because)とする。 (評) キーワードを用いて要約文を書いているか。積極的に辞書を活用しているか。
(班で)	・個人で書いた文章を班内で読みあい、吟味しながら1つの要約文を完成させる。その際に接続詞を使って、内容的にまとまりがあるように構成させる。
4. 本時のまとめ	⑤いくつかの班に要約文を発表させる。要約文をプロジェクターに提示させて、読ませた後に、教師がまとまりのある個所や良い点を補足して説明する。 (評) キーワードと接続詞を用いて、内容的にまとまりのある文章が書けているか。
5. 次時への発展	⑥本時の学習目標に対する自分の考えを書かせ、次時に向けての見通しを持たせる。宿題を提示する。

(3) 実践結果と課題

Warm-upでは毎時間ペアによる既習事項のインプット活動を行っている。図1のように2人1組のペアを作り、その単元で学ぶ表現を相互で読み合う活動である。一方が英語を読み、もう一方がそれを聞いて日本語で答える活動で、一分間ずつ役割を交替して行う。次に、書く活動のWarm-upとして取り入れているのが、トピックライティングである。これは、教師が提示したトピックに関してペアで1分間話した後、2分間でトピックに関する感想や考えを書く活動である。トピックに選んだ内容は趣味・好きなこと・友だち・夢・家族・学校・尊敬する人などで、本時では好きなことを選択した。中学校2年生のこの時期は、接続詞も学んでいるため、文法的にも内容的にも書くことができる生徒が増えてきており、書く時間の延長を求める生徒も多い。書いている間は生徒同士で相談はせず、個人で思考・吟味しながら書くように指導している。机間指導で見かけたスペルミスは、個人指導を行いながら、積極的に辞書を活用しようとする雰囲気を作るように工夫している。また、文と文のつながりや、内容のまとまりを意識させるために、前の単元Unit 5で学習した接続詞を使うようにも指導した。



図1 Warm-up中のペアトークとトピックの提示

既習事項の確認として、スクリーンにピクチャーカードを映して話の流れを確認し、音読練習をしたのち、骨子となるキーワードを個人で考えさせた。キーワードを見つけて要約文を書く学習は、前単元でもあるUnit 3とUnit 5でも行っていたので、机間指導で生徒の書く様子を見る限りでは、比較的素早くキーワードを見つけた生徒が多かったように感じた。図2の左は探したキーワードを黒板に書いている様子である。必ず使用してほしい単語については、図2の右のようにスクリーンで提示した。



図2 キーワードを個人で考え、全体で確認する様子

要約文を書く活動は、まず個人でしっかりと思考させる時間をとった。書く際には、全体で確認したキーワードと接続詞を用いること、辞書を活用することも伝えて机間指導を行い、確認した事項ができていない生徒に個別指導をしたり、早く済んだ生徒(図3左)にスペルチェックもするように声をかけたりした。この後、班内で要約文を読み合い、話し合っ、1つの要約文を書く作業をさせた。書き終わったらスペルチェックをしたり、接続詞があるか確認したりするよう指導した。



図3 個人思考(左)と班思考(右)の様子

本時の目標は、要約文を書くことであり、全ての生徒が個人で要約文を書くことはできていた。そこで、まとめとして、班でまとめた要約文を数班に発表させ、内容的に優れた部分、参考になる部分を教師が説明した。授業後に回収した要約文を見ると、スペルミスがあったり、キーワードが全て使えていなかったりするものもあった。



Step up your English skill(英語力の向上)

英語科8年授業プリント November 28日配布 No. 83

■A1N:個人で、要約文を書こう【キーワード、接続詞、文法ミスなし、スペルミスなし】



The organ stopped working just before Christmas in 1818.
Joseph finished writing a Christmas poem.
So, he asked Franz to write the music.
The next evening Joseph said about a new song.
People looked surprised because they had to sing it
with a guitar in church.
But it was nice and simple.
So, they began to sing.
This title is Silent Night.
Now it's popular all over the world.

Excellent

図4 発表した生徒とその班の作品

本単元の最後の時間に、教師が作成したモデル要約文をプロジェクターに映し、内容面と文法・表現面を踏まえながら解説した。生徒が班で書いてまとめた要約文を点検していくと、それらの多くが、キーワードを全て使いスペルミスは少ないけれど、要約文が長すぎてしまっているということが分かった。また、要約文を書くことは、事実を分かり易く、簡潔にまとめて書く指導がきちんと押さえきれていなかったことも明らかになった。これらのことから、今後要約文を書かせる際には、どの程度の分量にすればよいかを指導の中身に入れていく必要があると感じた。生徒の評価カードには、要約文を書く活動はためになるという意見が多いので、指導方法を吟味して次単元でも行っていきたいと思う。

5. おわりに

最後に今後の課題を二つ提示する。

第一の課題は文章（ディスコース）の構成である。文章の構成は、文（センテンス）の構成よりもはるかに自由度が高い。この自由度の高さの背後には少なくとも二つの要因がある。

一つの要因は、文章の構成要素である文には、文の構成要素である語ほどには、明確な機能・形式が定められないことである。説明のために、一つのディスコースをD、一つの文をS、一語をWとし、それらの記号に番号をつけて表記するなら、 $D=S_1+S_2+\dots+S_n$ であり、 $S=W_1+W_2+\dots+W_n$ となる。さて、Sの構成要素であるWは、「主語＝名詞→通常文頭に来る」「述語＝動詞→通常主語の後に来る」「目的語＝名詞→通常述語の直後に来る」などと、W₁以降のそれぞれのWの機能と形式が比較的明確に定められる。この並べ方のパターンは5（あるいは7）文型で定式化している。だから指導がしやすい。他方、Dの構成要素であるSには、S内のWほどには明確に機能と形式が定められない。もちろんある程度の傾向はある。例えばS₁なら「目的の明示」「背景の説明」「読者への問いかけ」「読者の意表をつく」など様々な機能がある。さらに形式にいたっては、S₁にはどのような文形式が来るべきかなどとは的外れの議論であり、D構成の定式化は困難である。どのようなSがどのような順番で来るべきかについて強い制約条件はなく、様々なSの様々な順列が「適切」なDと判定される。

二つ目の要因として、文構成は話し手・聞き手・話の目的が誰・何であろうと「正しさ」が厳密に決定で

きるのに対して、文章構成は話し手・聞き手・話の目的が誰・何であるかの組み合わせにより「適切さ」が緩くしか定まらないことがある。話し手は、聞き手がどんな既存知識・興味関心を持ち、自分がどんな目的で語るのかを考慮し、聞き手の心の動きを推測しながら（「心の理論」）文章をつむぐことになる。文章は、文よりもはるかに、対人的・相互作用的な要因を考慮して作成されなければならない。文章は話し手一人の都合だけで作成されるべきではない（そのような文章は、「非文法的」ではないにせよ、「要領をえない」「一人よがり」の文章として「適切」とはみなされない）。

これら二つの要因から、文章構成の指導は厳密な「規則」でなく、大まかな「原則」（あるいは「傾向」）によるものとなる。実際、文構成の規則を述べる文法書に比べて、文章構成の原則を述べる指南書は数において少なく内容記述において様々である。この理由もあり、日本の英語教師の文章構成の理解・指導はまだまだ十分ではない。今回も文構成は正しいものの、文章構成で少し首をかしげてしまうような文章が生徒から提示された時、教師は必ずしも明確な指導の言葉をもてなかった。文章構成の指導原則の明確化が第一の課題である。

第二の課題は文構成である。生徒は多くの英文を短時間に書いていたが、中には「I if become soccer player is play hard.」といった文もあった。日本語干渉であろう。干渉から自由になるためには、例えば「S+V+Plus」といった形で英語の文構成の鉄則を生徒に体得させる必要がある。文構成もそれほど容易な課題ではない。これからは文章構成指導を開拓しながらも、文構成指導も遺漏なく行わねばならない。

引用（参考）文献

- 1) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 外国編』東京：開隆堂出版株式会社、平成20年、pp.6-19.
- 2) 村上直子・松尾砂織・柳瀬陽介・中尾佳行「生徒の学習ストラテジーのきめ細かな記述と分析—特に英単語習得と文法理解の改善を目指して—」、『広島大学学部・附属学校共同研究紀要』、第38号、pp.361-365、2010.
- 3) 松尾砂織・村上直子・柳瀬陽介・榎葉みつ子「書く力を養う英語科の教材および学習指導開発」、『広島大学学部・附属学校共同研究紀要』、第39号、pp.369-373、2010.3.